
詩歌・小説の中のはきもの（第5回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

57 わら草履が好きで、わたしは家の中では夏冬問わず素足に草履で過ごしてきた。近年はさすがに年をとって寒さがこたえるようになり、冬のあいだ、幾日かは足袋をはくが、可能なかぎり裸足で履くのを好む。

わたしがわら草履を好むのは、履いた時の足の裏の感触がいかにもいいからである。とくにおろしたての新しいわらの履くと、足の裏が刺激されてほかほかと熱してくるような気がする。足許がしっかりしている感じもいい。 中野孝次

★『趣味に生きる愉しみ』（1999年刊）から。これは言うまでもないことなのであるが、世界のどこへ行ってもそこに住む人は、その土地に産出するものを素材にした着物、建物、食物の中で暮らしている。だから豊葦原瑞穂の国の住民が、わら草履を履くのは大変自然なことである。ところが今、稲の収穫に使われているコンバインはワラを裁断してしまう。しかもその後焼いてしまうのだ！

58 多少足が太くても自分の性格にはミニスカートがぴったり合っていると信じて、堂々とはきこなしたいというなら、それはそれでまた一つの生き方である。

そのために、バランスのいいトップスや靴も考えることが、自分のスタイルを

育てていくことになる。 光野 桃

★『私のスタイル』から。販売応援で靴売り場に立ってみると、他人の目を気にして、横並び感覚で靴を選定する人が多い。「お似合いですよ」と一声プッシュしてやると、それでお買い上げとなる。店員のセンスなどに頼らないで、わが社のブランドを選んだ顧客がいると、お礼を言ってから差支えなかったら理由を教えてくださいとお願いすると、大体そういう人は口数が少ないのだが、一つの生き方を決めていた。なんとなく靴を選ばないというのは人間として、とても大切なことだ。

59 履物史も容儀服飾史の一部として風俗史では重大なる方面である。然るに履物に関しては、古来、一種卑陋なるものに見做されてきた結果、これが研究も亦忽諸に附せられ、髪風、化粧、冠物などよりも更に大きな遜色がある。

江馬 務

★『江馬務著作集 第四巻』の「履物史」の冒頭。私には履物の歴史を書くことが卑しく志の低いものだという考えは全くないが、履物の通史を書くには知識も力もない。それで他人の書いた断片を拾いながら大きな全体にしようとしている。倦まず弛まず^う続けていれば、履物が何者であるのかが分かるような気がしているのである。

60 靴には個性が出てくる。たしかに、料亭とか、旅館の玄関先で、ずらりと並んでいる靴を見たときにしみじみと、そう思う。

人それぞれ、靴それぞれ、人が履きならした靴というのは、まさに芸術品といって、決して言い過ぎじゃあない。湧きあがってくるものは疑いもなく感動である。
神吉拓郎

★『たたずまいの研究』から。「靴に個性が出てくる」のではなくて「靴に個性を与える」のである。大きな会合などがあると、私は下足番を志願して他人の履物を観察するのを常とした。靴の腰の内側がこすれているものが多かった。靴を脱ぐとき無精している人が意外に多いのである。それから大きすぎる靴を履いて、爪先に斜めのしわが出ているものが多かった。これは個性とは無縁、売る側にも問題がある。感動したことは余りなくて、反省することが多かった。

61 ヨーロッパでは豪華に着飾ったレディたちが、目抜き通りをしゃなりしゃなりと歩いている。よく見るとどこへ行くわけでもなく、ただ目抜き通りを行ったり来たりしているだけなのだが、こういう光景は日曜日の午後の街の広場でも見られる。彼らは街を舞台と心得、それを背景に自分を美しく見せて、自分も楽しみ、見る人をも喜ばせようとしているのである。…少なくとも他人の目を意識しながら、優雅に歩くということは、十分心得ている。
水野潤一

★『旅は未知づれ』の「日本人の歩く姿勢の悪い理由」から。猫背、ガニまた、キョロキョロ、うつむき加減、それに加えて、

「自己演出の才能と関心」が希薄なのが姿勢を悪くしている理由だと著者は言う。「他人の目を気にするのは日本人も同じだが、日本人は道徳的、精神的なのに西洋人は即物的かつ美的」に他人の目を意識している。剣道をやった人や軍人は老人になってもピンと胸を張って姿勢がよく、歩き方も立派である。彼らの姿勢や歩行は「他人の目」によって修正させられたものであるのは事実である。

62 破産した私が、その後五年半で宮殿のような家と美しい屋敷を手に入れ、しかも世界でも名の知れた人々を顧客に数えることができたのはどうしてなのか。

答えは簡単だ、自然の女神のなせるわざである。私がこの激動の数年に発見したのは、自然の女神は、自由を与えられれば自身の傷を癒すということである。私の靴合わせは顧客の足を快適にするのみならず、彼らの損なわれた足を自由に。すると自然の女神がチャンスさえあればいつでも待ってましたとばかりに、その足を癒してくれるのである。

サルヴァトーレ・フェラガモ

★『夢の靴職人 フェラガモ自伝（堀江瑠璃子訳）』から。結局行きつくところは「健康な靴」であるということを知りながら、なぜひどく他人の足を傷つけてしまうのだろうか。フェラガモは恥をかきながら、人の骨格の解剖学を学んだことを書いている。靴屋でこんなに手の内を明らかにした人も珍しいのではないだろうか。

63 漢和辞典の部首でもこの《皮》と《革》が区別され、それぞれ別の部とされている。5画の《皮》部（部首名を「けが

わ」という)の部首字である「皮」は、動物の皮を手で剥ぎ取っているさまをかたどった象形文字であるが、その部には動物の皮だけではなく、「鞞^{ひび・あかざれ}」とか「皷^{にきび}」、「皷^{しわ}」など、人間の皮膚に関する漢字も収められている。人の皮膚には体毛がついているから、それもやはり「皮」に分類されるのだろう。

もう一つの《革》は9画にあって、部首名として単に「かわ」と呼ばれることもあるが、それでは《皮》部とまぎらわしいので、両者を区別して《革》部を「かくのかわ」とか「つくりがわ」と呼んだりする。

阿辻哲次

★『部首のはなし』から。スキンとレザーの違いは、皮革を扱う人の常識である。更に牛か豚か山羊かカンガルーかなどを見分けたり、牛ならば成長段階別にカーフかキップか、山羊ならキッドかゴートか区別できなければプロとはいえない。脱毛後、まだ鞣していない皮を「生皮」というが、テレビの人気番組だった西部劇『ローハイド』というタイトル名はカウボーイの使う鞭が「生皮」で造られていたことから取られていた。テキサスからカンザスまで牛を追うカウボーイは皆働き者だった。ところで、昔の日本で「生皮」といったら「怠けること、面倒くさがること、ものぐさ」という意味で「生皮者」といったらなまけ者のことだったのである。

64 『近郊への楽しいハイキング』という本を妻は愛読していました。革の登山靴を履きニッカボッカをつけ帽子には鳥の羽根をさした女性が杖をつきながら山を登っている写真が、その本の表紙でした。妻は表紙そっくりの服装をそろえ、杖を用意して、ハイキングにでかけたものでした。そんな正式な

格好をしなくとも、ただのハイキングなのだから、とワタシが言っても、妻は「形から入るのが大切よ」と言って、とりあわなかった。ゴム草履で歩いている者がいるようなコースでも、服装を崩すことがなかった。頑固な人でした。

川上弘美

★『センセイの靴』から。「平気、平気、要は気持の問題だよ」といってダークブラウンの靴を履いて葬儀に参列したり、「河童橋周辺なら気をつけてれば危なくないわよ」とばかり上高地一帯をハイヒールで歩き回ったりする人が苦手である。世の中のしきたりにがんじがらめにされて萎縮する必要はないが、周囲の人の精神のバランスを崩すほどの“自然体”論者には困惑する。高尾山はゴム草履でも歩けるが、私はそんな人と一緒に山歩きするのは御免蒙る。気が萎えてしまう。登山靴を見れば経験の程度、趣味の程度、それに人生に対する態度、つまり生き方まで分かる。

65 磨く他ない一足の靴である

前田雀郎

★川柳に詠まれる「靴」は、人生の核心にふれ、私たちの居住まいを正させる句が多い。字面とおりに読めば、たった一足の靴しか持っていないから磨く他はないということになるが、そんなふうには受け取るのは「貧すれば鈍す」るたぐいの人で、靴の手入れを怠っているのが普通だ。言うも野暮なことではあるが作者は靴に自分を投影しているのだ。